

新時代に戸惑う国民に指針

福澤諭吉の名を世に高からしめた初期の一大ベストセラーが『学問のすすめ』である。全17編からなるこの著作の2編において、福澤は天賦人權説と社会契約説という当時の欧米社会で主流の2つの思想を巧みに説いて、維新が成就したとはいえない新時代をどういう精神の構えで迎えたらいいのか、戸惑う国民にある指針を与えなかったであろう。

天賦人權説とは、生きとし生ける者はその権義（権利）においてすべて平等であり、これは天から賦与された生得のものであるという、アメリカの独立宣言やフランスの人権宣言などに具現された思想である。  
「人々所持の権理通義を以て論ずるときは、如何にも同等にして一厘一毛の軽重あることなし。即ちその権理通義とは、人々その命を重んじ、その身代所持の物を守り、その面目名誉を大切にすることの大義なり」  
「命」は生命、「身代所持の物」とは私有財産、「面目」とは

# 諭吉「学問のすすめ」のすすめ

体面のことである。たかたか数行のこの文章からだけでも、福澤の表現力の豊かさを垣間見ることができよう。

社会契約説とは、この権利において平等な人間相互の約束契約によって政府を樹立させ、この政府が国民の名代（代理）として国民の権利を守る役割を担わなければならない、という思想である。  
多くの人々が抱いている福澤のイメージは、天賦人權説や社会契約説をベースに日本の文明開化の必要性を説きつづけた啓蒙思想家、というものであろう。このイメージが誤っているわけではないが、実はこれは福澤思想の一面にすぎない。  
『学問のすすめ』の第7編が書かれたのは、明治7年3月である。ここで福澤は「殉教」「殉死」を人間道徳の最高のものとして説いたのである。  
暴政、つまり政府の暴力に人民

## 正論



拓殖大学顧問 渡辺 利夫

はいかに抵抗すべきかと問うて3策、「節を屈して政府に従う」「力を以て政府に敵対する」「正理を守り身を棄る」を示し、取るべきは第3策だといっている。殉教とは信念のために命を棄てること、殉死とは臣下が主君の死を悼み命を絶つことである。

この年、維新により特権を奪われた士族（不平士族）の反政府運動が蠕動し、その先駆けとなったのが前司法卿の江藤新平をリーダーとする佐賀の乱であった。しかしこの乱は明治新政府軍によって鎮圧され、江藤は梟首の刑に処せられた。梟首の刑とは晒し首のことであり、刎ねた首を獄門台に載せ、三日三晩これをみせしめにするという酷い刑罰である。江藤が佐賀に帰る前に、すでに

鹿兒島に下野していた西郷隆盛は、江藤から当然のように加勢を求められたもののこれを拒み、殉教、殉死を以て政府に抗せよと江藤に説いたのであった。  
福澤は西郷とは面識はないものの、相互に深く通い合うものをもって、相互に深く通い合う大業が西郷なくしては成し遂げられず、これなくして維新は不可能であったことを福澤はよく知っていた。開明なる西郷は不平士族を糾合して、みずからそれを打ち立てた新政府に武力を以て対抗し自滅するような無謀を企てる人物ではない、正理を諄々と説き、正理に殉じた人物だというのが福澤の見立てである。

福澤が嫌悪した「景況」  
西郷は西南戦争により政府に武力を以て刃向かった人物ではないが、そう考える人もいるかもしれないが、そうではない。西南戦争は鹿兒島私学校に蟄集する士族が、西郷の意に反して起こした暴走である。暴走発生の報を伝え聞いた西郷は「天だ、天でござい」といって、その後は死に場所を求めて九州山中をさまよい歩いただけであった。  
福澤は『学問のすすめ』17編を書き上げた年の翌明治10年9月に「明治十年丁丑公論」を執筆した。抵抗の精神の重要性を西郷隆盛の生きざまの中に描き切った名作である。そこには次のように述べられていた。  
「近來日本の景況を察するに、文明の虚説に欺かれて抵抗の精神は次第に衰頹するが如し。苟も愛国の士は之を救うの術を求めざるべからず」  
幕末・維新の喧嘩と動乱の時期を経て、近代主権国家への道をひた走っていたあの時代にあつたお、福澤は抵抗の精神、殉教、殉死の精神を説いたのである。  
日本の国力が衰退して国際的地位が一どきに低下し、ナショナリズムを鼓吹しつつ大國への道を歩む国家を隣に置きながら、国内政治の随分と小ぶりの問題に浮き身をやつしているのがわが日本の指導者群である。福澤が心底嫌悪した「日本の景況」とは、そんな風景だったのではないか。  
(わたなべ としお)